

同 志 社 大 学

2010 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2011 年 3 月 5 日提出

所 属	職 名	氏 名
神学部	教授	越後屋 朗
研 究 題 目	鉄器時代第 I 期のパレスティナにおけるカナン人、ペリシテ人、イスラエル人の共存の可能性についての研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>昨年度の研究テーマを今年度も継続した。</p> <p>昨年度は、トロント大学准教授（現在は教授）である Timothy P. Harrison が、1925-1939 年にシカゴ大学オリент研究所によって行われたメギド発掘調査における第 VI 層に関するデータをまとめた報告書、</p> <p>Harrison, Timothy P. Harrison, <i>Megiddo 3: Final Report of the Stratum VI Excavations</i>, Oriental Institute Publications, No. 127 (Chicago: Oriental Institute of the University of Chicago, 2004).</p> <p>の内容の詳細な検討を行った。この報告書では、土器や建築様式から、第 VI 層に文化の混合・多様性、すなわち、イスラエル人、カナン人、ペリシテ人の共存した跡が見られるとのたいへん興味深い主張がなされている。検討の結果、Harrison の主張・推測の土台となる第 VI 層の年代が確定的ではないことが問題点として明らかになった。</p> <p>今年度は、第 VI 層の年代について Harrison とは異なる主張をしている Israel Finkelstein の研究を中心に検討を進めたが、彼の主張も確固とした根拠を提出できてはいないことが判明した。</p> <p>今後の研究として、土器の観点から、メギドの第 VI 層と同じ時代の地層と推定される地域の発掘調査データを検討したいと考えている。</p>	